

「おもしろく」いきたい



巻頭言

仲野 徹*

Let's have Fun!

「はからずも」と人が言うとき、ほとんどの場合は図ったことを隠すためである、と、口の悪い知人が言っていた。しかし、本当に図らずも、大阪大学大学院・生命機能研究科の研究科長になった。覚悟はしていたが、思っていたよりも忙しい。できることなら、ちょっと図って、超過激な発言をすとか、とんでもないことをしでかすとかして、選ばれないようにしたらよかったかもしれないなどと不埒なことを妄想したりする。

世の中における生命機能研究科の知名度はどの程度なのだろう。平成14年に設立された研究科なので、もう十有余年になる。生命科学だけでなく、化学や物理学、数学や情報工学もとこみ融合研究とそのための教育をおこなう研究科である。何よりも強調したいのは、「おもしろい研究」をめざしているということだ。

おもしろい研究って何なんだろう？もちろん、研究者たちは自らの「おもしろい研究」を追い求めて日夜がんばっている。しかし、いまや、単におもしろいというだけでは許されない時代になりつつある。応用というプレッシャーが年々強くなってきているのだ。しかし、何をもって応用研究というかは難しい。応用できまっせえ、という目くらましをかましているだけの研究もたくさんある。もちろん応用研究にもおもしろい研究はある。しかし、あまりに応用を意識

しすぎると、自由度が限られてしまい、おもしろさは減じられかねない。

かといって、単に自分がおもしろいと思っている、というだけではダメだろう。とりわけ、大学での研究はほとんどが税金でおこなわれているのであるから、世間様に対する説明責任がある。言っではなんだが、ご本人は面白いと思っておられるのだが、何が面白いかがさっぱりわからない研究もよく見聞きする。おもしろい研究ではなくて、おもしろがらせる研究を目指さんとあかんのだ。まあ、おもしろいかおもしろくないか、というのは、あくまでも主観的なもので難しいのではあるが。

研究だけでなく、日々おもしろく生きる、というのも結構むずかしい。研究科長というのは、ご想像のとおり大小様々な問題に対処せねばならず、煩わしいことも多い。しかし、着任した時、研究科のテーマと同じく、おもしろくやっつけよう、と決意した。何事も、嫌々やろうが楽しくやろうが、とられる時間は同じである。それなら、楽しくやらないと損ではないか。

ある本に、楽しいから楽しそうに見えるようになるだけでなく、楽しそうにしているだけで楽しくなる、という研究が紹介されていた。そうだ、それでいこう！ということで、たとえ楽しくなさそうなことでも、できるだけ楽しそうに取り組むことにしている。言うほどたやすいことではないが、信じられないようなアホみたいなことに出くわしても、“It's new.” などと言いながらニコッと微笑むと、少しは楽しそうな気持ちになるから不思議だ。こんなご気楽なやり方で任期をまっとうできるだろうかと思いつつ、そうあってほしいと祈りながらすごしている毎日である。



* Toru NAKANO

1957年3月生
大阪大学 医学部 医学科 (1981年)
現在、大阪大学大学院 生命機能研究科
研究科長 医学博士 生命科学
TEL: 06-6879-3720
FAX: 06-6879-3729
E-mail: tnakano@patho.med.osaka-u.ac.jp